



ぎふNPOセンター「エコキャップ運動」

フェロー / 事務局スタッフ 林 宏澄さん

もったいないから、はじめた取り組み。

エコキャップ運動とは、ペットボトルのキャップを集め、リサイクル業者に買い取ってもらい、その収益で発展途上国の子供たちにワクチンを届けるというもの。そもそも、この運動、神奈川県的女子高生が「エコキャップを捨てるのはもったいない！」といったことから、はじめたそうです。

今回、取材させていただいた「ぎふNPOセンター」のエコキャップ運動も、あるスタッフが関心を持ち、個人的に活動していたことに端を発します。団体としては、2年ほど前から始めたエコキャップ運動ですが、当初は月に5箱(3,000個)程度であったものが、現在では月に1トン(40万個)近く集まるようになってきているというのですから、その広がり様は目覚ましいというほかありません。

地域内で完結させるのが、環境にもやさしい。

すでに全国の多くの地域で取り組まれているエコキャップ運動ですが、同NPOでは、これに加えて、県内でキャップが再資源化される地域内循環をつくりだしている点が特徴といえます。

「回収にかかる費用や運搬時に排出されるCO₂排出を考えると、地域内で完結させるのが効率的なんです」現在、エコキャップを持ってきてくれる団体は、警察、社協、病院、小中学校・高校、銀行、学童、公民館、生保会社、労働組合、福祉施設、一般企業と、極めて幅広い動きに。学校関係では定例化しているところもあり、「ワクチンで子どもの命が救える」と聞いて、懸命に集めてきてくれる子どもたちもいるそうです。

このように、当運動が急速な広がりを見せた理由の一つに、子どもから大人まで誰でも気軽に取り組めることがあります。何となくみんなが感じていた「もったいない」の気持ちを吸い上げながら、エコキャップの売却益で発展途上国の子供たちにワクチンを届けるという、一石二鳥の運動が多くの人を動かしているようです。

今後は、リサイクル業者に直接持参できるシステムにするなど、地域の回収体制や回収拠点の整備に取り組んでいきたいとのこと。地域に繋がりを持たせ、環境運動を支援する活動は、ますます重要な役割を担っていきます。

※エコムカワムラ欄におきましても、エコキャップ運動をはじめました。
集められる量はわずかですが、少しでもお役にたてればと考えています。

取材へのご協力に感謝します！

エコキャップは小さなものですが、みんなが参加すれば大きな運動になり、その大切さを広めることができます。環境活動は、誰でも気軽に取り組めることが大事なかもしれません。



年間回収量は480万個。(日本国内の消費量は年間190億本)回収率は国内消費総数の0.02%。



月間回収量1トンは、ポリオワクチン600個分になります。



資源分別のためエコキャップのシールははがすのが基本。



そのことをわかりやすく伝えるのも、仕事の一つです。



環境にやさしいまち一岐阜。住民の意識を高めるためのさまざまなサポートを行っています。